

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

虎の門病院下部消化管外科での研修を終えて

彦根市立病院消化器外科

佐々木 悠大

この度、日本臨床外科学会2024年度国内留学制度を利用し、2025年2月1日から2月28日までの4週間で国内留学をさせていただきました。様々な魅力的な施設の中から、大腸癌の年間手術件数は450件以上でその98%が低侵襲(鏡視下)手術で行われている全国トップクラスのハイボリュームセンターであり、以前より学会にて黒柳洋弥部長のランチョンセミナー等を拝見させていただき一度研修してみたいと思っていた、虎の門病院下部消化管外科での研修を選択させていただきました。

虎の門病院での1週間の研修スケジュールとしては、毎朝7時30分の部長回診から始まり、連日手術日に加え下記日程で各種カンファレンスが行われております。

月曜日：朝8時 消化器外科カンファレンス。

木曜日：朝8時 消化器外科カンファレンス。

金曜日：15時 下部消化管外科カンファレンス、ビデオカンファレンス。

月曜日と木曜日の消化器外科カンファレンスでは、下部消化管外科症例だけではなく、上部消化管・肝胆膵外科の症例についても検討されていました。カンファレンスではレジデントの先生方が術前サマリーを作成し、非常にスムーズでわかりやすいプレゼンをされており、研修初日にして感動したのを覚えております。金曜の下部消化管外科カンファレンスでは、術前症例検討に加えてレジデント～フェローまでの先生方が執刀された症例の編集動画を用いてビデオカンファレンスが行われていました。幸運なことに、私が自施設で行った手術動画を提示させていただき手術手技や術野展開についてアドバイスをいただき、とても貴重な経験となりました。実際の手術室では、まず入室から執刀までの流れが非常にスムーズで、麻酔科の先生やコメディカルのスタッフの方々のレベルが高く、膨大な手術件数を行えている理由の一つであると実感いたしました。手術はレジデントやフェローの執刀数も多く剥離ラインや郭清などについて適宜、黒柳部長をはじめ外回りの先生方から指導されながら緊張感を持って手術されていました。道具、術野展開および手術手技について統一され、それらを集中的に繰り返すことで型を身に付けると同時に、症例ごとの手術コンセプトに沿った手術指導がなされており、とても勉強になりました。特に、直腸癌手術においては直腸間膜の剥離に際してのA層およびB層の見分け方、A層を捉えてからの神経をしっかりと視認しながらの剥離、AB境界脂肪の切離のタイミング、剥離層の同定後にそれを広げながら正しい剥離層をつなげていく方法、「白黄色境界」での境界に沿った切離等を実際の手術中に直接黒柳部長から直接繰り返しご指導いただき、曖昧であった自分の剥離層に対する理解が少しずつ深まっていくのを実感しました。また、2週日以降からは実際の手術に参加させていただくことができ、外から見ていただけではわからない術者と指導医である助手の先生とのやりとりや手術中の緊張感を体感できました。全ての助言が明確に言語化されており、わかりやすく、熱意の伝わってくるものでした。特に、剥離ラインについてはmm単位の正しい層での剥離に対する妥協を許さない徹底した姿勢で「この数mmの違いが後になって大きな違いになるんや!!」という助言を黒柳部長が術者にされており、自身の手術でもつい曖昧になってしまう場面でしたので、改めて気が引き締まったのを鮮明に覚えております。常に解剖に基づいた正しい層での剥離を意識し、場面場面でのメルクマールを意識した再現性のある手術が行われており、時に厳しい助言もありますが熱意の伝わる指導がなされる素晴

らしい環境であると感じました。4週間という短い期間でしたが、とことん正しい剥離層にこだわった手術手技のみならず、術前準備や術中タイムマネジメントを含め虎の門病院での手術に対する熱意と緊張感は強烈な刺激となり、今後の外科人生の大きな糧となりました。最後に、黒柳洋弥部長をはじめ虎の門病院下部消化管外科のスタッフの皆さまに、この場を借りて御礼申し上げます。また、このような素晴らしい機会を与えてくださいました、日本臨床外科学会の万代恭嗣会長、国内外科研修委員会の高山忠利委員長をはじめとする委員関係者の皆さま、ご推薦いただきました滋賀県支部長の土井隆一郎先生および彦根市立病院の安田誠一部長、快く送り出してくださった彦根市立病院外科スタッフの皆さまにも御礼申し上げます。

